

# 「路上生活の若者をゼロに」

## 日本の団体が支援呼びかけ

日本のアジア・コミュニティ・センター21(ACC21)とアジア宗教者平和会議東京(ACCRP東京)は15日、路上で暮らす若者のための国際デー記念フォーラム「増えているフィリピン」のストリートチルドレン、ZEROにできるのか?」をオンライン開催した。2部構成で参加者60人以上の同フォーラムでは、元ストリートチルドレンで、支援を経て現在は路上の若者への教育など幅広い活動に携わる2人から直接聞く機会も持たれ、活発な質疑応答が行われた。

事業の推進、日本政府への政府開発援助(ODA)活用の提案、日本企業にも資金やストリートチルドレン研修・職業訓練といった技術的な協力を求めたいとしている。

ACC21と協力関係にある比のストリートチルドレンの支援団体「チャイルドホープ」のヘレン・キント事務局長は、路上の子どものためには①身寄りがなく一人で生活する②家族と暮らす家が③日中は路上で物乞い、夜はスラムに帰る④といったケースがあるとし、「路上で仕事をすると子どもや学校へ行く子どもは③に含まれる」と説明。しかし、経済的理由で学業を諦めるケースが多いという。

また、根本原因として

政治・社会・経済的な理由を挙げ、政府役人の解決へのイニシアチブの不足、差別や貧困に言及。路上の子どものための家庭環境は、大家族や保護者自身の自覚が乏しい、仕事が無い、育児放棄や教育以上に即物的な利益を優先する傾向、違法薬物の使用や虐待など、多くの要因が複雑に混在しているという。さらに「自らの選択で路上に出る子どももいる」ことを明らかにした。ただ、路上には早期妊娠やいじめ、ギャンググループや違法な運び屋といった問題も渦巻いている。

▼「人前で話せなかった」

首都圏マニラ市のバランガイ(最小行政区)青



アジア・コミュニティ・センター21とアジア宗教者平和会議東京が主催するオンラインフォーラムの様子

年評議会委員長として地区の防災や青少年教育、青年活動の取りまとめ役をこなすジュード・ナティビダットさん(25)は、6歳で精神疾患を抱える父親に自宅を追い出され、路上生活を余儀なくさせられた。「身の回りで起きていることをなかなか理解していた」とし、「ごみ箱の残飯を食べ、路上で眠り、車の駐車を手伝って現金を稼いだ」と当時を回想した。

チャイルドホープと出会う、教育機会や訓練への参加を経て「こうした機会を無駄にしたくない」と明か

「誰ひとり残さない」をモットーに、現在21カ国で自然災害や紛争などの被害者救援、比では貧しい女性や子どもたちの人身売買阻止の活動を行っている。同代表理事は「今日の話を聞いていて胸が痛くなった。路上の若者の生活実態、この厳しさを克服するために外部の支援者の必要性を実感した」と述べた。

さらに「世界の約2千人が46億人の富を持って富んでいく異常な経済格差を見越すことはできない。共に比のストリートチルドレンをゼロにしよう」と呼びかけた。

ACCRP東京とACC21は4月12・15月31日まで、目標金額200万円のクラウドファンディング「路上で暮らす子どもたちがいない未来へ」を実施している。公式サイト「ストリートチルドレンZEROキャンペーン」。

ACC21は4月12・15月31日まで、目標金額200万円のクラウドファンディング「路上で暮らす子どもたちがいない未来へ」を実施している。公式サイト「ストリートチルドレンZEROキャンペーン」。

19日時点で21人から約12万円の支援が集まっている。(岡田薫)

### 関係者らが別れ惜しむ

#### 東京で野口裕哉さんを偲ぶ会

まにら新聞の創業者で2020年8月にマニラ首都圏の自宅で亡くなった野口裕哉さん(享年74)を偲ぶ会が15日、東京都中央区銀座で開かれた。会には、まにら新聞のOBや関係者、野口さんが過去に記者として働いていた共同通信社の関係者ら38人が出席し、野口さんとの思い出話に花を咲かせ、別れを惜しんだ。

と、お酒が好きだった故人を象徴するサンミゲルビールの瓶、まにら新聞の前身「KYODO DAILY NEWS」の1992年5月3日付け創刊第1号紙面が飾られ、出席者らは遺影を眺めたり写真を撮ったりして故人をしのんだ。

黙とうをささげた後、呼びかけ人を代表して共同通信社元常務理事でまにら新聞のデスクも務めた安田紀夫さんがあいさつ。共同通信の警視庁担

り、「事件取材に明け暮れていた記者生活を名残惜しうに語るのを聞くのがすごい好きだった」と話した。また、野口さんがまにら新聞を起業した当時のことに触れ、「父にとつては心残りだった新聞記者への思いを比べて実現することができた。比で自分の夢をかなえた人生だったと思う」と感慨深そうに語った。

献杯の音頭を取ったのは1990年代半ばに通信事業大手KDD(現KDDI)のマニラ支店長として比に住み、野口さんと交流があった島山茂信さん。当時、マカティ市にあったまにら新聞事

務所社長室の隣に島山さんが使用していた一室があったといい、「野口さんには大変にお世話になった」と杯をささげた。

石山永一郎・元まにら新聞編集長もあいさつ。自身が共同通信名古屋支社で東南アジアからの出張労働者の取材をしてきたころ、比から日本に一時帰国していた野口さんと初めて会ったことを振り返り、「その当時から野口さんは一目会っただけでなんともなく取り込まれるような懐の広さがあった。今に至るまでずっとジャーナリストの先輩だと思っている」と語った。

会場には、にこやかにほほえむ野口さんの遺影

つ。共同通信の警視庁担

つ。共同通信の警視庁担

つ。共同通信の警視庁担

**フィリピン 大衆紙の話題**

**大統領夫妻、祝結婚30周年** マルコス大統領とルイス夫人は17日、結婚30周年を迎えた。大統領は「親も一度結婚してください!おめでとう」とツイート。30年越しの再プロポーズは成功し、「彼女はYesと返事した(再び)!」という。大統領は親族や親しい友人たちの記念写真を公開。その多くは1993年の結婚式に出席した人たちという。他にも、「30年経った今でも私がいたい場所はあなたの隣だけ。いつだって夢の女性だ」との甘い言葉と一緒に、夫人の額にキスしている写真を投稿した。(19日・テンポ) **トップニュース(19日)**

》チェコ首相、OFW受け入れ検討(ブレティン)

》大統領、外務省に「台湾OFWのケアをするように」(スタンダード)